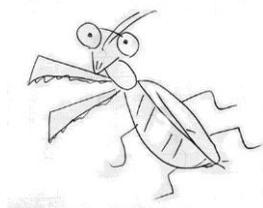
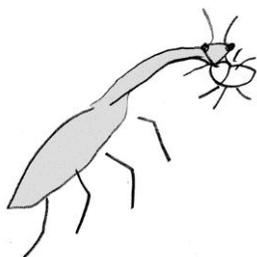




自然遊学館だより

2005 AUTUMN



2005.10.15 発行
貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

- 「近木川クリーンキャンペーン& 魚庭の海づくり大会」……………1
- 「夜の海探検 満月編・新月編」…………… 1
- 「近木川河口生きもの調べ・カニ釣り」…………… 4
- 「夕暮れのバッタとり 夜の昆虫の生態」……………5

■いきものよみもの

- 貝塚市初記録!大川のジネズミ……………7
- 近木川で初記録のカニ(2) シオマネキ……………7

【泉州生きもの歳時記】

- ヤドカリ……………8

■館長コーナー

- 秋 1……………9

■投稿

- 島根の海の幸 ……………10
- 国際フィールドスクールに参加して……………11

■学芸員実習

- 「遊学館でよかったあ〜!」
(近畿大学 小林優佳・中山寛子・八田実紀) ……12
- 「博物館実習を終えて」(南九州大学 宮原亮平)
……………13

■寄贈標本の紹介…………… 14

■遊学館スタッフ日誌…………… 15

■自然遊学館で読める!

遊学館スタッフおすすめ本 ……………17

- 『自然と遊ぼう 海の楽校』
- 『野生動物救護ハンドブック』

■おしらせ…………… 18



■行事レポート

近木川クリーンキャンペーン & なにわ魚庭の海づくり大会

場所：近木川下流、二色浜

日時：2005年7月18日(祝) 10:00～12:00

参加者 39名 (近木っ子探検隊)

「ゴミをなくそう。水をきれいに！」をキャッチフレーズに大阪府、大阪府漁業共同組合連合会、貝塚市が合同キャンペーンを行いました。海の日^{7/18}の活動として、河川と海辺での2つの活動を連携させ、川のゴミが最終的に海に到達していることを実感してもらい、ゴミを減らそうという意識を効果的に啓発する狙いです。

一般の人たちや西小学校の生徒に混じって、これらの活動に参加した近木っ子探検隊は39名。近木川永久橋に集まり、大阪府岸和田土木事務所の方よりゴミ掃除の説明を受けた後、①可燃物 ②不燃物 ③空き缶・ビン類の3種類に区分しながらゴミ拾いを行いました。また、ハクセンシオマネキの生息する干潟に生えたヨシが、大きく広がりすぎている感があるため、ヨシ刈りにも挑戦しました。

後半は二色浜での海づくり大会に合流しました。豊かな大阪湾をみんなの力で取り戻そう！と第4回を迎えた大阪漁連の主催する海への感謝活動です。大阪湾をフィールドに様々な活動をしている12団体のブースや、漁船の豊漁旗が並び賑やかでした。自然遊学館のブースは「二色浜の生きものたち」をテ

ーマにし、海遊館の新野大さんが撮影された海洋生物写真を展示しました。その他、地曳網体験やホシガレイの稚魚放流、タコ飯などの試食会など、漁連の方たちが企画した目白押しイベントがありました。



魚庭の海づくり大会での自然遊学館ブース

(山田 浩二)

夜の海探検

場所：近木川河口～二色浜

夏休みに恒例となった夜の海探検。毎年、応募される方も多いため、募集は大潮にあたる満月と新月の2回に分けて行いました。

○ 満月編

日時：2005年7月23日(土) 16:00～21:00

参加者 72名

講師に大阪府水産試験場の鍋島靖信さんを迎え、多くのボランティアスタッフと学芸員実習中の大阪府立大学総合科学部の学生2名に手伝って頂きました。

4つの班に分かれ、自己紹介をした後、ま

ずは投網を打つ練習です。小学生以下の子どもたちにとって、投網はやはり重いようで、主にお父さん方が頑張っていました。ひとしきり練習した後は、波打ち際まで行き、本番です。満ちてくる海水とともに魚がやってきているようで、投網が多少丸く広がらなくとも捕獲でき、その度に歓声が上がっていました。クロダイやスズキ、クサフグ、マハゼなどの幼魚を中心とした15種類の魚を投網で捕ることができました。

沈む夕陽をながめつつ砂浜に腰を下ろし、しばしの夕食タイム。次に昨晚から仕掛けて置いた8つのカゴ網を引き揚げました。昨年はいしガニやマダコなど、たくさん入りましたが、今年はフタハベニツケガニの稚ガニが1匹入っただけでした。このような結果になったのは、海底で酸欠状態の貧酸素水塊が発生しているためではないかと鍋島先生は説明していました。



魚介類の説明に耳を傾ける参加者

日が暮れてからは、突堤から海面に向けてライトをあて、光に集まってくるプランクトンをプランクトンネットで、その他の生き

ものを柄の長いタモ網で採集しました。バチ抜けと呼ばれる、生殖のために泥から這い出し海中へ泳ぎだしたアシナガゴカイや、下顎が長く伸びたサヨリの幼魚などが皆の注目を集めていました。また、集めたプランクトンを入れたビンを揺すって刺激をあたえると、赤潮プランクトンで知られるヤコウチュウ（夜光虫）の発する光がほのかに浮かび上がりました。

「新月の夜の海探検」で観察された動物リスト 20050723

和名	採集法			
	投網	かご網	灯火	その他
有櫛動物 ウリクラゲ				○
環形動物 アシナガゴカイ (生殖型)				○
チロリ				○
節足動物 ケフサイソガニ				○
イソガニ				○
モクスガニ (種)				○
イシガニ			○	
ガザミ			○	
タイワンガザミ			○	
フタハベニツケガニ (種)	○			
カクベンケイガニ				○
ユビナガスジエビ				○
テッポウエビ				○
クルマエビ			○	
アナジャコ属sp. (種)			○	
ユビナガホンヤドカリ				○
軟体動物 アサリ				○
ムラサキイガイ				○
スクミリンゴガイ				○
脊椎動物 マハゼ	○			
ヒメハゼ	○			
アサヒアナハゼ	○			
ボラ (種)	○			
メナダ (種)	○			
メジナ (種)	○			
クロダイ (種)	○			
スズキ (種)	○			
コイ	○			
クサフグ	○			
マゴチ	○			
ハタテヌメリ	○			
トビヌメリ	○			
コショウダイ (種)	○			
イシガレイ (種)	○			
ハオコゼ				○
サヨリ (種)				○
アナゴ (種)				○

(種) : 体サイズから明らかに未成熟な個体
(生殖型) : 生殖群泳のため体型が変化した個体

● 新月編

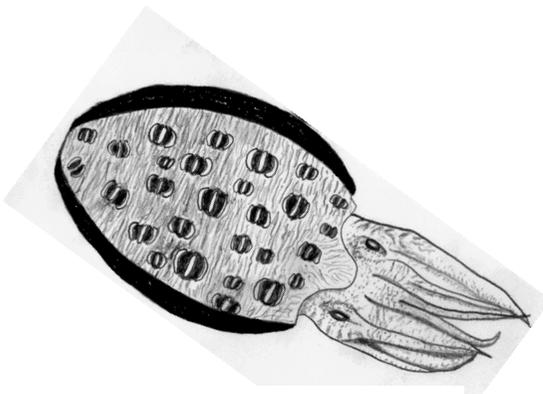
日時 : 2005年8月6日(土) 16:00~21:00

参加者 70名

1回目の夜の海探検から2週間後、今度は新月(闇夜)に2回目を行いました。講師

には貝類に詳しい児嶋 格さん、海遊館の新野 大さん、大阪府水産試験場の睦谷一馬さんに来て頂き、また、前回同様、多くのボランティアスタッフや、学芸員実習中の近畿大学農学部の3名の学生にご尽力頂きました。行事内容は満月編のときと同様の流れを予定しており、皆さん楽しみにしていましたが...

スタートの投網打ちでは、小さな軽い投網を各班1つずつ準備したかいあって、子どもたちも自分で投網を打てることに満足げでした。「セイゴ→ハネ→スズキ」、「イナ→ボラ→トド」と成長に応じて呼び名が変わる出世魚など8種類の魚が採集されました。また、波打ち際には30センチほどのカミナリイカの死体が打ちあがっていました。



カミナリイカ (コウイカ科)

日が暮れてくるとともに、次第に空は厚い雨雲に覆われてゆき、雨が降り始めました。しかたなく湾岸高速道路の高架下で雨宿りをしながら、夕食をとりました。その後、雨脚はいつこうに衰えないばかりか、雷雨となり行事予定を進めることができなくなりま

した。仕掛けて置いたカゴ網は、スタッフで回収しましたが、前回同様、漁獲物は少なく、イシガニ、イッカククモガニが1匹ずつ入っただけでした。



雷雨の中、湾岸線の高架下に避難し解説を聴く

しばらく雨が上がることに望みを託して、雨宿りしながらも、これまでに採集した魚介類の解説を聴いたり、質問などをやり取りして過ごしました。児嶋先生が貝で作ったペンダントも参加した子どもたちにプレゼントされました。しかし、天気予報はいよいよ雷警報になったため、残念ながらここで行事の終了を決めたのでした。

「満月の夜の海探検」で観察された動物リスト 20050806

和名	採集法			
	投網	かご網	灯火	その他
節足動物		○		
イシガニ		○		
イッカククモガニ		○		
クロベンケイガニ				○
アカテガニ (抱卵個体)				○
フナムシ				○
棘皮動物				○
サンショウウニ				○
軟体動物				○
カミナリイカ				○
脊椎動物	○			
マハゼ	○			
マゴチ	○			
ボラ (種)	○			
クロダイ (種)	○			
スズキ (種)	○			
コイ	○			
クサフグ	○			
コショウダイ (種)	○			

(山田 浩二)

近木川河口生きもの調べ・カニ釣り

場所：近木川河口

日時：2005年9月17日(土) 10:00~15:00

参加者 63名

近木川で一番下流に掛かる脇浜潮騒橋のたもとに集合し、近木川左岸沿いのヨシ原に向かいました。まずはメインイベントのひとつ、カニ釣り大会です。タコ糸の先にエサとなる館長お手製のタクワンを結びつけ、ヨシの生える地面の土にボコボコと開いたカニの巣穴めがけて落とし込みました。カニたちは、上から落ちてくるエサの動きに反応して、さっと寄ってくるものもいれば、あまり反応を示さないものもあります。エサをはさんで口に運ぶのを見計らって、ここぞとばかり釣り上げます。この日の参加者全員の釣果は、40分間でハマガニ 35匹 (♂24匹、♀11匹)、クロベンケイガニ 20匹 (♂15匹、♀5匹)、アカテガニ 3匹 (♂3匹)、アシハラガニ 2匹 (♂1匹、♀1匹) でした。釣り上げたカニは雌雄の確認と甲幅をノギスで計測し記録しました。各種、大物を釣り上げた上位3位までの方を下に挙げます。

ハマガニ

- 1 和田勇斗 ♂ 56.3 mm
- 2 田中ひろと ♂ 45.4 mm
- 3 和田勇斗 ♂ 42.7 mm

クロベンケイガニ

- 1 浅井いずみ ♂ 37.0 mm
- 2 鈴子勝也 ♂ 33.2 mm
- 3 吉田侑生 ♂ 27.7 mm

アカテガニ

- 1 岡本 拓磨 ♂ 30.6 mm
- 2 高野 晴一郎 ♂ 13.8 mm
- 3 吉田 侑生 ♂ 6.2 mm

アシハラガニ

- 1 小南 幸子 ♂ 24.7 mm
- 2 日高 佐知枝 ♀ 18.1 mm



この日いちばんの大物、ハマガニ！

カニ釣りをしているすぐ横では、近木川河口干潟のシンボル、ハクセンシオマネキも観察することができました。

午後からは潮のよくひく時間帯なので、河口の海辺に広がった干潟で生きもの観察を行いました。貝に詳しいお馴染みの児嶋 格先生にも駆けつけて来て頂きました。

礫の下からは、甲羅模様の様々なケフサイソガニがうじゃうじゃ、その他、貝やゴカイ類、波打ち際にはユビナガホンヤドカリやミズハゼなど次々と生きものを見つけました。「これはいったい?!」と、礫の表面を這っているペタンコな生きものを発見した人は興奮気味。プラナリアの仲間、海に生息するヒラムシです。児嶋先生も近木川

河口では初記録となるクログチという二枚貝の生息を確認し、感慨深げでした。



イジマヒラムシ

近木川河口の生きもの観察会		20050917			
門	綱	科名	和名		
軟体動物門	腹足綱	ケハダヒザラガイ科	ヒメケハダヒザラガイ.....L		
			クモリアオガイ.....L		
			コモレヒコガモガイ.....L		
		ニシキウスガイ科	インダタニガイ.....L		
			コンダカガンガラ.....D		
		タマキビ科	タマキビガイ.....L		
			アラレタマキビ.....L		
			マルウスラタマキビ.....L		
		カリハダサガイ科	シマメノウサガイ.....D		
		タマガイ科	ツメタガイ.....D		
		イトカケガイ科	セキモリガイ.....D		
		アッキガイ科	イボニシ.....L		
			レイシガイ.....L		
			アカニシ.....L		
		アトコロガイ科	ムギガイ.....L		
		オリレイヨフバイ科	アラムシロガイ.....D		
		有肺垂綱	カラマツガイ科	カラマツガイ.....L	
			キクノハナガイ.....D		
		三枚貝綱	フネガイ科	サルボウガイ.....D	
			カリガネユガイ.....L		
		イガイ科	ムラサキイガイ.....L		
			ミドリイガイ.....D		
			コウロエンカワヒバリガイ.....L		
			ホトギスガイ.....L		
			クログチ.....L		
		イタヤガイ科	イタヤガイ.....D		
			アワジテヒロ.....D		
		オミマガシワ科	オミマガシワ.....L, D		
		イタボガキ科	マガキ.....L		
			ケガキ.....L		
		マルスタレガイ科	アサリ.....L		
		イワホリガイ科	セミアサリ.....L		
			ウスカラシオツガイ.....L, D		
		バカガイ科	バカガイ.....D		
		マテガイ科	マテガイ.....D		
		扁形動物門	渦虫綱	多岐腸目	イジマヒラムシ
		環形動物門	多毛綱	ケヤリムシ目	カンザシゴカイ科の1種
				オナテイソム科	スコカイイソム
				イソム科	イワムシ
		節足動物門	軟甲綱	ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ
				アナジャコ科	アナジャコ
				ガザミ科	ガザミ
				イワガニ科	ケフサイノガニ
					ヒライソガニ
		脊椎動物門	硬骨魚綱	ハゼ科	ミズハゼ

凡例 L: 生貝, D: 死殻

(山田 浩二)

夕暮れのバッタとり・夜の昆虫の生態

場所：千石荘

日時：2005年9月24日(土) 16:00~20:00

参加者：14名

千石荘では1999年以来、雨で中止になった2003年を除いて、毎年秋のこの時期に、加納康嗣先生をお招きして、鳴く虫の声を聞く会を行ってきました。

日が暮れる前に、まずはバッタ採りから。ショウリョウバッタやササキリのなかまが多く採れました。疫病菌に冒されて白い泡状の物質に覆われたコカマキリの死体も見つかりました。バッタ採りとは言いながら、子どもたちに人気があるのは、何とんでもカマキリです。

夕食前の加納先生の話は、バッタとキリギリスの耳の構造の違いや産卵方法の違いから、昆虫の口器の進化まで幅広く、しかも子どもたちに分かりやすいものでした。



何がとれたのかな？

日が暮れて虫たちが鳴き出します。ササキリ類が草上で鳴く姿は、ちらほら見ることができました。カヤヒバリはあちこちから鳴き

声がするものの、姿を見ることはできません。マツムシやカントンも鳴き声がするものの、なかなか姿を見せることはありません。帰路にカントンの姿だけをなんとか見ることができました。最後に、加納さんが名張から持参されたクツワムシを、その「うるさい」鳴き声をどうしても聞きたいという子どもたちに配って、行事を終えました。

現場で気になったことは大井谷池の改修工事のために敷いた仮設の砂利道の脇に、オオブタクサ、セイトカアワダチソウ、ヒメムカシヨモギなどの帰化植物が生い茂り、サナエタデが減るなど、景観が変わってしまったことです。チガヤが減ってネザサが増えた林縁の環境の変化は、周辺が立ち入り禁止になって踏圧が減ったことと関係があるのかもしれない。以前は確認されたクルマバッタは、開けた草地に生息する種ですが、まったくいなくなってしまう可能性があります。クルマバッタが人知れずいなくなってしまうのだとすれば、それはとても悲しいことです。

最後に、行事当日に確認された昆虫と植物のリストを示しました。昆虫に関して、特にステージの表記のないものは成虫での確認を示しています。植物の*印は、帰化植物であることを示しています。なお、千石荘の現場は大阪市の所有地であり、当日および下見の立ち入りは大阪市の許可を得たものです。

9月24日(行事)

昆虫: オニヤンマ、セスジツユムシ、サトクダマキモドキ、オナガササキリ、ウスイロササキリ、ホシササキリ、クビキリギス(幼虫も)、クサキリ、エンマコオロギ、ツヅレサセコオロギ、モリオカメコオロギ、マツムシ、アオマツムシ、カヤヒバリ、クサヒバリ、シバズ、マダラスズ、カントン、カネタタキ、オンブバッタ、トノサマバッタ、イボバッタ、ツチイナゴ(幼虫も)、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ(疫病菌に冒された死体)、セジロウンカ、オオヨコバイ、ツクツクボウシ、チッチゼミ、アカスジカスミカメ、メダカナガカメムシ、クモヘリカメムシ、ナナホシテントウ、ヒメカメノコテントウ、シロコブゾウムシ、ヨモギワタマバエ(ゴール)、ホソヒラタアブ、キチョウ、ヤマトシジミ、ウラギンシジミ、イチモンジセセリ

植物: <きく科>オオブタクサ*、コセンダングサ*、ヨモギ、アメリカセンダングサ*、アメリカタカサブロウ*、ヒヨドリバナ、セイトカアワダチソウ*、ヒメムカシヨモギ*、アキノノゲシ、ノゲシ、<おおばこ科>オオバコ、<きつねのまご科>キツネノマゴ、<なす科>イヌホオズキ、<くまつづら科>ヒメクマツヅラ*、<ぶどう科>ヤブガラシ、<とうだいぐさ科>エノキグサ、<まめ科>ノアズキ、クズ、ヤブマメ、ツルマメ、タンキリマメ、<やまごぼう科>ヨウシュヤマゴボウ*、<ひゆ科>ヒナタイノコヅチ、ホソアオゲイトウ*、<いらくさ科>ヤブマオ、カラムシ、<あかざ科>シロザ、<たで科>サナエタデ、イヌタデ、<くわ科>カナムグラ、<ひがんばん科>ヒガンバナ、<つゆくさ科>ツユクサ、<かやつりぐさ科>コゴメガヤツリ、ヒメクグ、タマガヤツリ、<いね科>エノコログサ、

キンエノコロ、アキノエノコログサ、セイバンモロコシ*、チカラシバ、オヒシバ、メヒシバ、イヌビエ、カゼクサ、ススキ、シマスズメノヒエ*、オオクサキビ*、アゼガヤ

(岩崎 拓・湯浅 幸子)

■生きものよみもの

貝塚市初記録！大川のジネズミ



自然遊学館には、交通事故で死んだ哺乳類や鳥などいろいろな標本が持ち込まれます。標本はすぐ剥製に作れないときは冷凍しておき、まとめて処理をしています。

9月のある日、いつものように冷凍庫から標本を取り出していると、見慣れない包みが目に留まりました。ビニール袋の中に『モグラ？From 山口家のネコ』と書いたメモがありました(自然遊学館わくわくクラブの会長である山口家のネコは、これまでもさまざまな小型哺乳類を遊学館に贈ってくれたネコです)。

さて、この死体、なんだか感触が変です。

毛の色は似ていますが、あきらかにモグラの大きさではありません。小さなモグラの仲間にはヒミズという動物がありますが、ヒミズの毛はもっと真っ黒です。

袋からコロンと取り出した瞬間、私はおもわず「あっ！」と叫んでしまいました。たしかに食虫類(モグラの仲間)ではありますが、それはトガリネズミ科のジネズミでした。

体長は6~8センチ、グレーの毛並み、とがった鼻をしています。モグラにはない大きな耳があることも特徴です。山地を中心に生息しているとされていますが、記録や標本が少なく詳しい生息状況は分かっていません。

『大阪府における保護上重要な野生生物—大阪府レッドデータブック—』(2000)では情報不足とされています。今回の標本は貝塚市での初記録であるとともに、自然遊学館の初標本となりました。

■採集データ

2005年4月18日 貝塚市大川：山口フミ子採集

■計測値

体重：9.9g 頭胴長：75mm 後足長：12.4(爪含む13.9)mm
尾長：47mm 耳介：8.4mm 2005年10月6日計測

(西澤 真樹子)

近木川で初記録のカニ(2) シオマネキ(スナガニ科)

2005年6月12日、近木川河口左岸のヨシ原に囲まれた干潟で、近木川初記録となるスナガニ科のシオマネキ *Uca arcuata* を1個体

採集しました。この個体は雌で、甲幅は29.2mmでした（液浸標本 KCMN-K447）。

この日は、大阪自然環境保全協会「海の観察会」の方たちと河口で行う観察会の下見に来ていたときでした。ハクセンシオマネキの上流側への分布域の広がりを感じて観察していたところ、ハクセンシオマネキに混じって少し遠いところに、黒っぽい大きな体と赤っぽいハサミが目にとまりました。「シオマネキ！！」と高鳴る興奮を抑えて、干潟に降りて近づきました。巣穴はまさに煙突状でシオマネキに特有の形状です（チムニーと呼ばれます）。2m程離れたところで、しばらくじっとして待っていると出てきました。やはりシオマネキ。雌です。体サイズから少なくとも生後2年以上経っているものと考えられます。河口域は調査等で何度も行っているつもりだったのですが、繁茂するヨシ群落に視界を遮られている場所もあります。まだ他にもシオマネキが生息しているのではと、その後も注意して調査していますが、9月末までのところ追加個体はありません。

本種は国内の干潟に生息する底生生物の現状をまとめたWWF JAPANサイエンスレポート（和田、1996）において、絶滅に向けて進行しているとみなされる「危険種」とされており、同じく危険種とされるハクセンシオマネキと比べても記録される地域は限定的です。近隣では徳島県の吉野川河口にまとまった個体群が維持されており、また和歌山県の紀ノ川河口で比較的小規模な個体群が記録されていますが、大阪では男里川河口に脆弱な個体群を確認するにとどまっています。



シオマネキ *Uca arcuata*
（♀、近木川河口 2005年6月12日採集）

（山田 浩二）

【泉州生きもの歳時記】

ヤドカリ 宿備（寄居虫）

潮のひいた海岸で巻貝を見つけると、貝殻の中から脚が出てきて歩き出し、「なんだヤドカリやっ」というご経験をされた方は多いと思います。ヤドカリはエビやカニと同じ仲間の甲殻類で、体は固い殻の外骨格に覆われていますが、貝殻の中に入っている腹部は柔らかくねじれています。死んだ巻貝の殻を背負って身を守っているわけで、生きている貝を襲って貝殻を得たものではありません。自分の体の大きさにフィットした貝殻でないといけないので、成長に応じて貝殻を交換します。ときには気に入った貝殻をせおった別のヤドカリにケンカをしかけ、その貝殻から無理やり追い出し、横取りするものもあります。貝殻を背負わない裸のままでは、魚やカニなどに簡単に捕食されてしまいますので、お宿探しはまさに死活問題です。

貝塚市の海岸で見られるヤドカリは、これまで5種類が確認されています。近木川の河口でもっともポピュラーなのはホンヤドカリ科のユビナガホンヤドカリです。ヤドカリの2対ある歩脚の末端にある節（指節）が長いので、その名があります。ホンヤドカリ科に属するものはいずれも、右のハサミ脚が大きくなります。ホンヤドカリの仲間には他にも石積み護岸の岩場では、歩脚とハサミ脚の先端付近が白いホンヤドカリや、歩脚とハサミ脚が緑色かつ毛深く、触角が赤いケアシホンヤドカリが見つかります。



テナガツノヤドカリ

ヤドカリ科の2種は今年、相次ぎ貝塚市で初記録されたものです。1つはテナガツノヤドカリで、4月29日の二色浜生物調査で左のハサミ脚が大きなヤドカリを採集し、図鑑で調べ確認しました。その後、二色浜での調査や観察会でも目にする事が多く、普通種として生息していると思われます。ただ、和歌山市の和歌浦周辺にたくさん生息している同種個体に比べ、体サイズが小さいようです。もう1つはコブヨコバサミで、5月27日に鈴子佐幸さんが近木川の河口で採集され、館に持ち込まれたのが最初です。以上の

5種の中では最大のヤドカリで、ハサミ脚は左右相称です。9月2日に二色浜でシュノーケリング調査を行った際には、浅海域で5個体が採集されています。



ツメタガイを背負うコブヨコバサミ

(山田 浩二)

■館長コーナー

秋 1

いうまでもないことですが、遊学館だよりは年に4回発行しています。言い換えますと、春夏秋冬の号とも言えそうです。その秋の号から「館長コーナー」を頂きました。その第1号なので、「秋1」という題をつけました。

私は「紅葉がり」が大好きです。秋が来るとじっとしてられません。まず、10月の中旬が過ぎますと、大峯山系へ偵察に出かけます。今年の紅葉ぐあいはずねて山道を車で走るのです。すると、そのあたりの山はもううっすらと色づき始めているのです。そして、だいたい今年の紅葉の出来映えがわかるのです。11月に入るとすぐ、国道309号線

で「御手洗溪谷」から、「川迫川溪谷」へと向かいます。このあたりは何回行っても涙が出てくるほどの感激を味わいます。行者還トンネルを抜け、大好きな小処温泉から大台が原へと向かいます。ここは、既に落葉しているのです。ブナの木が多いからです。169号線に再び入り、川上村から天川村へと山越えもします。まるで、紅葉の美を復習するように大峯山脈を往復横断するのです。年にもよるのですが、既に、大峯山系の山々は初冠雪しています。11月の5、6日でも中腹まで雪を見せてくれるときもあって、紅葉の色と合わさって言いようのない美しさです。

春の新芽が始まって、夏に大活躍し、秋には、役目を終えて去っていく自然の偉大さにも驚きます。中学生の時に学んだ「光合成」です。光と水と二酸化炭素、葉緑素がうまく働きあって、植物を成長させるだけでなく、生物の生存に不可欠の酸素を作り出す作用です。(時には、酸素を必要としない生命体もあるようですが、それはさておき、)おかげで地球上の生き物は生きていけるのです。大まかなとらえで間違っているかも知れませんが、葉としての役目を果たし、それだけでなく、葉はさらに、大きな仕事をするため、紅葉になるようです。気温も低くなり、植物の成長が弱くなった時、紅葉になります。通常、葉で作られたでんぷんが葉の付け根のところを通過し、植物体全体に送られ、自己成長を果たしますが、秋になりますと、その付け根のところが開ざされ、養分が移動できなくなります。だから、紅葉になると学習した記憶があります(間違っていれば教えてください)。

さい)。

シカは緑の葉より紅葉の葉を好んで食べます。緑の葉より養分が多いからかも知れません。彩が美しいからかも知れません。なぜか紅葉を好みます。

草食動物だけでなく、紅葉はやがて、落葉し堆積します。多分養分が多いであろう葉は、堆積して良質の堆肥を作り出します。なんとすばらしい営みなのでしょう。私たち、人間はこの紅葉する植物に一杯学ばなくてはなりません。

その前に私は光輝く山々の紅葉としっかり仲良しになって、心の癒しをいただくのです。今年も御手洗溪谷には絶対行きます。そして、私には今年の最終紅葉がりは京都ですが、その京都のどこにしようかと今考えているところです。

(川村 甚吉)

■投稿

島根の海の幸

毎年、僕は島根県出雲市へ漁師をしながらブドウ栽培をする祖父母のもとへ行きます。この夏は、友だちを連れて行ってきました。毎日僕たちは海で泳ぎました。島根の海はきれいでたくさん生きものを見ることができます。岩場では潜ってみると、カサゴ、大きなギンポ、グレ、イシダイ、キュウセンや熱帯魚のような魚が何種類か見られました。

また魚以外では鮮やかなウミウシが幾種か、50cm ほどのゴカイやイダコ、バフンウニやムラサキウニ、それにガンガゼ、アカウニ、トコブシ、アワビ、サザエなどもたくさん見られ、食べられるものは捕まえました。その他にもたくさんの生きものを見ました。

砂浜ではキスや低層に住むアカエイ、シタビラメの仲間、ガザミ、キンセンガニ、マンジュウガニの仲間が見られました。

船釣りをすると、キスが入れ食い状態で釣れました。毎晩、夕飯は海の幸でごちそうになりました。



島根県出雲市の日本海にて

僕の祖父は昔、大阪の高槻市に住んでいましたが、夏にはよく二色浜に来たそうです。そのころは二色浜が大阪のなかでも、とてもきれいだったそうです。僕たちがきっちり意識すれば、また昔のようにきれいで、島根のようにたくさんの海の幸に恵まれた大阪湾になると思います。

(近畿大学附属和歌山高校 2 年生

貝塚市二色在住 寺田 拓真)

ガジャマダ大学等主催 第 2 回 国際フィールドスクールに参加して

ガジャマダ大学工学部建築計画学分野などの主催によるフィールドスクール(9 月 10 日～15 日)に始めて参加した。インドネシアジャワ島中部にあるボロブドゥール遺跡は、パワン、マンドオットの二つの寺院と共に世界遺産に登録されている。今回のスクールは、遺跡を取り巻くガラランガンヤ、タンジュン・サリの二つの村を対象に文化的景観の保護と管理に関する知識を学ぶことを目的としている。

おとずれた村は、昔から変わらない家々が存在していた。豊かな緑と川、思わず川で遊ぶ子どもたちの光景が目についた。残念ながら乾季のため、泳ぐ子どもたちの姿を見ることができなかったが、釣りから帰る子、学校帰りの子、荷物を運ぶ子などを見ることができた。川は洗濯、水浴び、トイレに利用されている。川沿いには、近木川にもよくある竹やぶがあり、親近感を持った。自然と人工の遺跡、取り巻く村は違和感を感じない。わずか 5 日間の滞在であったが、近木川の活動、足もとを見つめ直すいい経験をさせてもらった。



タンジュン・サリ村(中央ジャバ州)内を流れる川

(橋本 夏次)

■学芸員実習

◆今年の夏、自然遊学館では大阪府立大学・近畿大学・南九州大学から計6名の博物館学芸員実習生を受け入れました。例年以上にあらゆる作業に熱心にとりくんだ今年の実習生。感想を紹介します。

=====

「遊学館でよかったあ〜！」

こんにちは！！私たちは学芸員実習で今年の夏に自然遊学館でお世話になりました小林優佳・中山寛子・八田実紀の近大三人娘です。その思い出をお話したいと思います。

小:あれからもう一ヶ月近くなるんですねえ。

中:早いなあ。

八:色々やったよな。

中:一番がんばったのはやっぱり投網の修理とたも網作りよな。

小:やんなあ。でもあれはいい経験やったな。

八:出来上がったのを夜の海探検※1でほめてもらったよね。雨が降ったけど雷の話とかも聞いてよかったよね。

中:でも、もっと投網やりたかったなあー。

小:じゃあ、またイベント参加してやらせてもらおうよ。

八:てか、もうわくわくクラブ※2にも入ったしな。行こ行こ！！

小:ハクセンシオマネキの調査も連れてってもらったよな。

中:カニが出てくるまでじっと待ってるのはしんどかったな。

八:つついウトウ…じゃなくて！あんな近くで求愛されると思わへんかったわー。

小:えー、私もされたもん！！

中:自分らじゃなくてカニにやる！！



働き者の“近大三人娘”

八:つかさあ、あんなに簡単にカニとれると思わへんかったって。

中:えー。私はとれへんかったし…はじいたら巣穴にinしてしまったし…

小:スッポンもらいに、岸和田の資料館※3にも行ったなあ。結局、体が大きすぎてもらえなかったけど。

八:展示してあった動物の剥製すごかったよな。てか怖かったし。

中:いっぱい写真撮ったわ。迫力満点やった。

中:その帰りに石取りにいったよな。

八:でっかい水槽も掃除したね。

小:植物探しに行つての展示物作り※4も楽しかったよな。

中:毎日、えさやりもしたなあ。

八:掃除をして下さるおばちゃんとも仲良くなれたよな。

小:最終日に岩崎さんが資料作ってくれてた

のには感動した！

八：マメガニの定量調査もしたけど、このときはいなかったよね。

中：行事予定表作りもやらしてもらったよね。絵も描いたしね。

小：来館者の聞き取り調査もしたよな。

八：あ一本当に実習、遊学館でよかったなあ。

小・中：ほんまに一！

小・中・八：また絶対遊学館行こうな！！

————と、こんな風に思い出がいっぱい出来ました。はしゃぎ通しの私たちを9日間も面倒みていただき、ありがとうございました。またお世話になることもあると思いますが、その時はよろしく願います。

どうも、ありがとうございました☆

(近畿大学農学部3回生

小林 優佳・中山 寛子・八田 実紀)

※1…行事「新月の夜の海探検」

※2…自然遊学館に集うボランティアのグループ「自然遊学館わくわくクラブ」のこと。定期的な自然生態園作業などで当館をサポートしながらさまざまな楽しい活動を行っている。

※3…「きしわだ自然資料館」おとなりの岸和田市にある。

※4…館内の植物の生品展示「自然遊学館の周辺の植物」

=====

「博物館実習を終えて」

先ず始めに8月22日～9月3日の約2週間、実習担当の山田さんを始め自然遊学館のスタッフの皆様には大変お世話になりました。有難うございました。2週間という期

間、始まるまでは少し長いような気がしましたが、実際に始めてみると自分でも驚くほど短い期間で、気付いたときにはもう実習が終わっていたように思います。

博物館の仕事と言うのは利用者に見えない部分が多く、普段の業務の合間に行事の準備や資料の収集、調査、研究等実に様々な活動が行われています。実習中、私が行えたことは全体の業務から考えると極々一部、それも高度な専門知識が無くとも行える部分だったと思います。実際に博物館で働く場合はそれに加えて事務的な業務、専門的な業務を行わなければならない為忙しいと言った言葉では表せないような過酷さがあるのではなかろうかと思います。こういった事に気付くことができた今回の実習は、これから博物館学芸員を目指す上で意識、考え方において非常にプラスになりました。



(南九州大学環境造園学部3回生
宮原 亮平)

=====

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2005年9月分まで)

◆浅井雅俊さんより

貝塚市馬場たわわ 産

アカマダラコガネ生体1点

(大阪府レッドデータブック「絶滅危惧Ⅱ類」)



アカマダラコガネ

◆浅井夏海さんより

二色浜（海浜緑地）産

スズメダイ 生体1点

◆食野俊男さんより

貝塚市稲谷 産

ミヤマクワガタ♀生体1点

二色浜（海浜緑地）産

キュウセン 生体3点

イシダイ 生体1点

貝塚市蓄原 産

ツバメ幼鳥 死体1点

◆食野聡志さんより

二色浜（海浜緑地）産

マダコ 生体1点

◆鈴子晴久さんより

和泉葛城山山頂 産

ヤブヤンマ♀1点

岬町深日港 産

イトヒキハゼ 生体2点

◆森本静子さんより

田尻町嘉祥寺 産

ショウリョウバッタ♀羽化殻

◆鈴子達也さんより

貝塚市木積松葉荘 産

ハリガネムシ *Chordodes* 属の一種

◆鈴子佐幸さんより

貝塚市木積松葉荘 産

サワガニ5点

チラカゲロウ幼虫1点

マルヒラタドロムシ属の一種1点

◆西村恒一さんより

貝塚市稲谷 産

オオムラサキ成虫♂1点

(幼虫として採集したものを飼育)

(大阪府レッドデータブック「準絶滅危惧」)

貝塚市蓄原 産

ミドリシジミ成虫♂1点♀1点

◆五藤武史さんより

貝塚市二色 産

セアカヒラタゴミムシ成虫1点

高石市綾園 産

ゴマダラチョウ成虫1点

◆藤原猛さんより

貝塚市地藏堂：南小学校 産

アオダイショウ 成体1点

- ◆寺下晃弘さんより
貝塚市二色 産
アブラコウモリ 死体 1 点
- ◆文野春美さんより
貝塚市蕎原 産
ノウサギ 死体 1 点
- ◆岸さんより
中国 産
繊維状石膏 1 点
- ◆山田一成さんより
貝塚市北町 産
セアカゴケグモ死体 1 点
- ◆木室仁太さんより
貝塚市二色 産
アリ女王 1 点 (種名は調査中です)
貝塚市二色産
チョウセンカマキリ ♀成虫 1 点
阿蘇山 産
火山岩
- ◆綿石慶太さんより
貝塚市蕎原 産
タカチホヘビ 1 点
- ◆青柳正人さんより
貝塚市蕎原 産
ハヤシウマ成虫♂1 点
ヒロバネヒナバッタ成虫♂1 点
- ◆福岡武司・怜奈さんより
熊取町七山 産
ワモンゴキブリ成虫♀1 点
- ◆樽谷修一さんより
泉佐野市フェリー埠頭 産
アジに寄生したウオノエ 5 点
- ◆高野ひとみさんより
岬町淡輪港 産
アジに寄生したウオノエ 10 点
- ◆濱谷巖さんより
岸和田市別所町 産
カシノメイガ成虫 2 点

- 寄贈資料
秦 祐宣さんより
植物画
松村 勲さんより
カニ生態写真



タカチホヘビ

(大阪府レッドデータブック「情報不足」)

■遊学館スタッフ日誌

7月13日 男里川河口で小型クジラのスナメリが漂着しているとの情報を受け、きしわだ自然資料館の風間学芸員と現地に急行しました。発見したのは、泉南高校の田中正視先生で野外授業の際に見つけたとのこと。浜に打ち上げられていたスナメリは全長約1m12cm、頭部の骨が露出し、かなり腐敗がすすんでいました。周りは異臭につつまれ、照りつける日差しの熱気と合わさって、くら

くらしてしまいました。

現在でも大阪湾にスナメリが住んでいる貴重な証拠となりました。なお、このスナメリは大阪市立自然史博物館に引き取られ、骨格標本になるそうです。(山田浩)



漂着していたスナメリ (白骨化した頭部)

9月11日 綿石慶太さんに蕎原で採集したタカチホヘビ(生体1点)を寄贈していただきました。当館では、1998年7月11日に千石荘での行事で講師の竹本卓哉さんが確認して以来の記録となりました。その話を伺っている時に、西村恒一さんが蕎原で採集したムラサキツバメ(シジミチョウ科)の幼虫を持参され、こちらも当館の所蔵標本にはない種で、1日で貴重な記録が2件も得られました。(岩崎)

9月13日 今年生まれのハクセンシオマネキの稚ガニを近木川河口で、十数個確認しました。干潟に開いた直径2、3mmの小さな巣穴の周りには、これまた小さな砂団子がたくさん転がっています。海でプランクトン生活をしていた幼生が、稚ガニに変態して干潟に暮らし始めると、もう親と同じ生活のスタ

ートです。潮がひくと巣穴から干潟表面に現れてお食事をはじめます。表層の砂泥を口器に運び、エサを濾しとった後の砂かすを団子状にして捨てているのが砂団子なのです。

(山田浩)



ありがとう



7月、8月に実施された「二色の浜夜の海探検」では、自然遊学館の活動が、大勢のボランティア(自然遊学館わくわくクラブ)に支えられていることに深く感動しました。

この行事、すでに4回目とは言え、夜の海のことですから不安は山ほどありました。ところが始まると、ボランティアスタッフは、私が暇になるほどきぱきと動いてくださり、不安はことごとく粉碎され、しっかり夜の海を楽しむことができました。

今年は、ジュニアボランティアも活躍しました。福山の大学から、もみじまんじゅうをお土産に持って駆けつけ、行事が終わると学校に戻って行った達也さん。ひよろひよろ体型が気になりますが、自炊生活の最初は仕方ないかもね。

いつまで来てもらえるか、お嫁入りの日が心配な(来る?来ない?)幸代さんも、仕事を終えて開始時刻に滑り込み、的確な誘導をありがとう。

自然遊学館わくわくクラブの方たちは、自然遊学館にとって本当に宝物です。参加者に紹介するとき、いつも誇らしくてなりません。

(白木 江都子)

自然
遊学館で
読める！

遊学館スタッフ おすすめ本



◆山田浩二（水の生きもの担当）おすすめ！
『自然と遊ぼう 海の楽校』長谷川孝一著



山と溪谷社：1600円：ISBN4-635-52030-7

この「自然と遊ぼう ～楽校」シリーズは、フィールドごとに海・川・森・田んぼと4つの分冊に分かれ、野外活動の楽しみ方をガイドしています。本書の中で「自然と遊ぼう！自然のなかには遊びがいっぱい。誰でもできる野外体験のヒントを満載。子どもも大人も自然のなかへ飛び出そう！」とうたっていますが、これは当館の「自然の中で遊んで学ぶ」というポリシーと相通じます。

「海」、「川」、「森」、「田んぼ」という場所はこういった環境なのか、また、どんな生きものが見られるのかについて、多くのページを割いて写真、イラストで分かりやすく解説している点は特におすすめです。また、生きものの観察法や採集法なども具体的に紹介されており、役立ちます。

◆西澤真樹子（哺乳類担当）おすすめ！
『野生動物救護ハンドブック
—日本産野生動物の取り扱い—』



文永堂出版：8000円：ISBN4-8300-3143-3

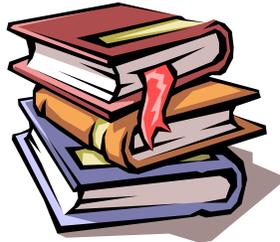
けがをして弱っている動物を見つけたとき、たくさんの人が「何とか助きたい」と考えます。ですが、知識がないばかりに与える餌を間違えたり、世話をしようとして動物にけがをさせられたりということも起きます。そんなときに助けになるのがこの本です。主に哺乳類・鳥類について、1:生物学的特徴 2:主な救護原因 3:食性と給仕方法 4:飼育管理と野生復帰の4つの項目が紹介されています。約10年前に出版されたため関係する法律の部分が変わっている部分もありますが、実際の体験に基づいた「すぐに使える情報」が満載です。

けがをした動物を見つけて困ったときには、自然遊学館にこの本があることを思い出してください。

※ただし、救護が目的の場合でも鳥類・哺乳類の捕

獲は基本的に禁止されています。応急手当をしたあとは近くの野生動物担当部局に連絡しましょう。自然遊学館に相談する場合は電話 0724-31-8457 かメール shizen@city.kaizuka.lg.jp まで。

自然遊学館にはここに挙げた本以外にも専門的な図鑑から絵本まで生物・自然科学を中心に約 1000 冊の図書(2005 年 9 月現在)、全国各地の博物館の館報、展示解説書、研究報告などがあります。「この生きものに関する本が見たい」「生きものの飼い方を知りたい」など、本探しの相談もできます。調べもののできる身近な図書室として、自然遊学館をどうぞご利用ください。



(西澤)

■おしらせ

行事案内の裏面に「館長の目」登場



毎月みなさんにお配りしている行事案内のチラシ。11 月分から裏のスペースを利用して川村館長の連載「館長の目」がはじまりました。自然遊学館でのさまざまな発見がお得意の切り絵とともに紹介されています。第一回目はムクドリ羽についてのエッセイです。

自然遊学館だより 2005 秋号 (No. 37)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色 3 丁目 26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2005. 10. 15

この小冊子は市内印刷で作成しています。